

# 海の緑を取りもどせ！

海の中にも森があるのを知っていますか？

かつて、対馬の周りの海には、海藻や海草が茂る広々とした緑の森がありました。

対馬の水産業はもちろん、食文化や伝統行事にも欠かすことのできない海の森は、現在、どんどん姿を消し私たちの生活に大きな影響が生じています。

豊かだった海の緑を取り戻すため、市内で様々な取り組みが進められている今、藻場を守り育てることを生活の中に取り入れて活動を始めた人たちがいます。

海に広がる緑と山の緑の間に泳ぐ小魚（美津島町賀谷地区）

## 海の森「藻場」とは？

藻場は、沿岸の水深の浅いエリアで海藻あるいは海草が茂っている場所や、群れになっている場所を指します。陸から見えるところだけでなく、水深20mほどの深い場所まで藻場は広がることから、まさに海の森のような場所です。藻場は、私たちが口にする海藻を恵んでくれるだけでなく、海の生き物が生きるため、ひいては地球環境を保つための大切な役割を担っています。



海草：海中で花を咲かせ種子によって繁殖する。（アマモなど）  
 海藻：海で生活する藻類で、胞子によって繁殖する。（コンブなど）

## 消えてゆく「藻場」

現在、日本中の海で、藻場が失われています。対馬周辺の海では、平成2年ごろから、はっきりとした変化が現れるようになり、現在、ほとんどの地域でこれまでの藻場の姿を見ることができなくなっています。

温暖化の影響や、海藻を食べる生き物の影響、栄養豊富な陸からの水が流れなくなったり、薬品などで海が汚れたりしたことなどいろいろな原因が考えられていますが、解決策は見つかっておらず、漁業などに大きな影響が出ており、現在、多くの方が藻場再生に取り組んでいます。



海藻が茂り森ようになった海



海藻が無くなった海  
 (令和元年)

対馬市での海藻類の水揚げ量

出典：水産庁「港勢調査」



冬の味覚、カジメのみそ汁も食べる機会が少なくなった

## 漁業者が取り組む藻場再生

対馬市では、国の交付金などを活用し、漁業者の皆さんとともに、藻場の調査や、海藻を食べる魚介類の捕獲、海藻の種苗を海に入れて育てるなど、藻場の再生に向けた取り組みを行っています。今年度は事業を行う22組織の内、16組織が藻場再生のための活動をしていますが、昔のような藻場を取り戻すまでには至っておらず、根気強い活動が続いています。

今回は、その中から美津島町賀谷地区での取り組みをご紹介します。



ワカメ母藻を海に投入する  
 (氷崎地区藻場保全組織)

海藻を食べる魚を駆除  
 (三浦湾地区藻場保全組織)



かつぎ（潜り漁）を行う鎌田さん

## 海の変化に立ち上がった漁業者

美津島町賀谷地区で一本釣りや潜り漁を行う鎌田衛さんは、平成23年に漁師を始めてから、刻々と変化する賀谷の海の中を見つめてきました。海の命を頂いて生活する漁業者として、海の変化をただ見ているだけでなく、今できることを考え行動に移そうと、平成30年に地域で賀谷地区藻場保全組織を立ち上げ、海の中を定期的に観察し、藻場を再生させるための取り組みを行ってきました。



NPO法人賀谷藻場保全会のメンバー



賀谷沖の海底を定期的に潜って調査



漁業者だけでなく、様々な立場の人が関わって海の保全に取り組む

## 思い出の中の豊かな海を取り戻したい

平成27年ごろ、海藻が姿を消した賀谷の海。海藻が茂り、森のような海の姿や、そこに集まる貝や魚たちは、もはや思い出の中しか存在しなくなりました。かつての豊かな海を取り戻したいと、活動を続ける中、賀谷の人たちは、海だけでなく、山や海に流れ込む水や泥の影響にも目を向けるようになります。

雨の後に海に流れ出る泥水の影響を調べたり、近くの山に木を植えたりするなど、幅広い視点から海の再生を考えるようになった鎌田さんは、漁業者だけが藻場再生に関わることに違和感を感じます。そこで立ち上げたのが、NPO法人賀谷藻場保全会です。



## 漁師だけでなく、みんなが海に関わる場を作る

これまで海を守る取り組みは、主に漁業者が取り組んできました。しかし、賀谷藻場保全会は漁業とは直接関わりのない人も参加できる仕組みを作ることも活動の柱としています。藻場を増やすための取り組みに参加したり、山に木を植えたりすることで、山と川と海のつながりを体感してもらい、海のことにもっと興味を持ってもらう取り組みを行うなど、たくさんの方が海に関わることを目指しています。

## 海を守る取り組みも、生活の一部にする

賀谷藻場保全会では、海の恵みを消費者に届け、活動するための資金を得ることで、この活動を将来にわたって続けていくことを目指しています。これまで特別な活動だった「海を守る取り組み」を、生活のサイクルの中に取り込むことで、海や自然と共に生きていくことにつながると考えています。



環境を守ることが海の恵みにつながる

## 自分たちが楽しくしていなければ、孫の代まで は続かない

NPO法人という組織を作って活動を行うことになったのですが、これは「世界のため」とか「他人のため」とか「将来の子どもたちのため」とかという目的ではなく、今、漁師として生きているじいちゃん、ばあちゃんが、喜んで海に出て漁ができるためにやっていると思っています。

自分も含め、今、海に出ている人がワクワクするような漁業ができないと、絶対に次の世代にさせたいとは思いませんし、子どもや孫もやりたいとは思わないでしょう。今やれることをやって、自分たちが楽しいと思える生活を作りたいと、この活動を続けています。

「母なる海」という言葉の意味をよく考えてみると、海への



育てた海藻を海に投入

の向き合い方が  
見えてきます。

人が「お母さん、ありがとう」と言うように、ただただ、目の前にある恵みに感謝するしかないのではないのでしょうか。私たちの活動を通じて、海で生活している漁業者だけでなく、対馬に住んでいる人たちがそのことに気づいてくれて、対馬の豊かさがとても素敵なおことに気づいてくれたらと思います。また、私たち漁業者は、とかく海にばかり目が行きがちです。山で生活する人、研究者、サラリーマン、子どもたち、色々な人たちと関わることで、広い目線で海を見ることができたら、もっと良い活動になると信じています。

賀谷という小さな地区での取り組みですが、ここでの成果が対馬の藻場再生、漁業再生のヒントにつながれば嬉しいです。



NPO法人賀谷藻場保全会 鎌田 衛 代表

対馬の海にも詳しい  
清野先生に聞きました!

### 海の姿を伝える新たな取り組みに期待

鎌田さんは、潜り漁の傍ら、何年も海の様子を写真に撮り、データを取ってこられました。これはとてもすごいことで、その証拠を集め、外に発信することは、全国の漁師さんの中でも珍しい存在だといえます。

さらに、データを取った後で、分析や今後の取り組みについて考え改善されています。この積み重ね自体も、対馬のための立派な財産になります。対馬の漁業者の皆さんも、海の変化を肌で感じているとは思いますが、それがどのように変化をしているのかを、漁業者以外の人たちも知ることができれば、新しい発見が生まれるかもしれません。

当事者である漁業者の皆さんが周囲を巻き込んで、これまで関心のなかった人たちが活動に参加することによって、生活のあり方を少しずつ変えていくきっかけになるかもしれません。



九州大学大学院 清野 聡子 准教授

海洋生物学、海岸環境保全学、生態工学などが専門。自然と人間が共生していく社会づくりを研究しており、対馬でも様々な取り組みに参加。対馬グローバル大学でも、環境分野のゼミを担当

対馬が抱える大きな問題となっている藻場の消失を、新たな切り口による解決に向け動き出したNPO法人賀谷藻場保全会の活動。私たちは、このような地域の課題を解決しようと動き出している人たちのことに関心を寄せ続けることが大切ではないでしょうか。